

風と花びら

平塚武二作



岩波少年文庫 2082

913 風と花びら

平塚武二作

岩波書店 1977

230 p. 18 cm (岩波少年文庫 2082)

小学上級以上

風と花びら

岩波少年文庫 2082

1977年7月7日 第1刷発行 ©

¥ 400

作 者 ひら つか たけ じ
平 塚 武 二

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行者 岩 波 雄 二 郎

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111 振替東京 6-26240

落丁本・乱丁本はお取替いたします

印刷・製本：法令印刷

風と花びら

平塚武二作

岩波少年文庫 2082

もくじ

魔法 まほう のテーブル	7
虫 むし のくる家	17
水泳 すいえい のはじめ	39
風と花びら	53
おどり	97
自転車 じてんしゃ 乗り	113
ヨコハマのサギ山	131

たまむしのずしの物語……………151

馬ぬすびと……………171

解説……………長崎源之助……………223

鈴木義治画

風と花びら

他八編

魔法まほうのテーブル

列車れっしやの中は、ヒーターがききすぎて、むしあつく、ぼくは上着うわぎをぬぎ、ネクタイをゆるめて、うとうとしていました。

ふと、目をさますと、まどの外は、夜になっていました。そして、ぼくのせきのとなりに、老紳士ろうしんしがこしかけて、ねむっていました。

ねむっているといいましたが、その老紳士ろうしんしは、ときどきくるしそうに顔をしかめたり、ためいきをしたり、なにかわるいゆめでもみているようでした。

あんまりくるしそうなので、ぼくは老紳士ろうしんしのかたをゆすぶりました。

「もしもし、どうかしましたか？」

ぼくは、ぼんやりと目をあけた老紳士ろうしんしに声をかけました。

「ああ、あらがとう。」と、老紳士ろうしんしは、ひくい声でいいました。「わたしは、このごろ、わる

いゆめばかりみるのです。どんな人よりも、わたしがひどく不幸だからです。」

「不幸……？」

「わたしがどんなに不幸か、きいてください。」

こういうと老紳士は、ぼそぼそ話しはじめました。

四、五年まえのことですが、ある日、わたしは、さんぽのかえりに、うらどおりの古道具屋でちょっとかわったテーブルを見つけました。そのテーブルは、がらくた道具の上に、さかさまにおいてありました。四本のあしが、へビのかたちをしていました。下でとぐろをまき、上のほうでひらべったいカマクビを、ぐっとのばしているかたちです。ぶきみなかざりでしたが、ものずきなわたしは、ひと目でそれが氣にいました。ねだんをきくと、そう高くありません。金をはらうと、小さいテーブルでしたから、片手にぶらさげて、家へもってかえりました。

むろん、そのときは、ただ、あしのかたちがおもしろいとおもっただけで、それがおそろしいテーブルとは氣が付きません。へやのすみにおいたまま、あまり氣にもとめませんでした。

ところが、一週間ほどすぎたある日、古道具屋の主人がきて、こういいました。

「あの……、まことにもうしかねますが、先日お買いあげいただきましたテーブルですが……、あれをおかえしねがえませんか？」

どうして、そんなことをいつてきたのか、わたしにはわかりません。わたしにしてみれば、おしくてかえせないほどのテーブルではありませんから、かえしてやろうかな……と、おもいましたが、ふと、古道具屋のうしろに目をやると、ドアのかげに、きみような身なりの外国人が、かくれるようにして、立っていました。顔も手もあさぐろく、頭には、むらさき色のきぬのターバンを、まいていました。

（こいつは、うっかりかえせないぞ）

と、わたしは、きゆうに気がかりました。

「いや、それは、こまる。」

と、わたしは、わざとむずかしい顔をして、いいました。

「あの……ねだんをばいにしても、よろしいですが……。」

と、古道具屋は、ぜひかえしてもらいたいと、ペコペコしながら、くりかえし、くりかえし、

いいました。あんまりしつっこいので、わたしは、むかむかしてきました。

「いやだといったら、いやだ！ きみはしつっこい男だな。かえりたまえ！」と、となりつけました。

きみような外国人は、かくれてようすをうかがっていたようですが、いきなりころぶように、げんかんとびこんできて、頭をひくくさげながら、ふといたみ声で、わたしになにかいいました。どこの国のことばかわかりませんが、テーブルがほしいといういみのようでした。

「ダーマースクス、ダーマースクス……。」

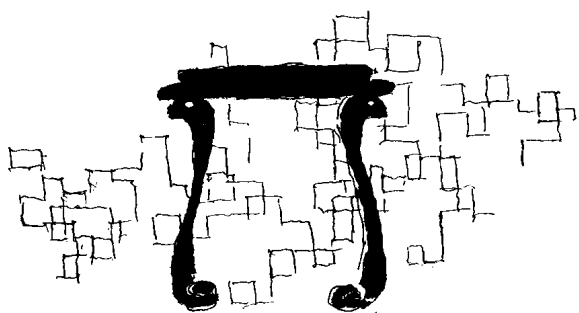
と、ことばのあいまいまいに、うなるような声をだします。それが、わたしをおどかすようにきこえるので、わたしは、かえって、テーブルをかえしたくなりました。

「いやだ！ かえれ！」

と、ことわりました。

「しかたがありません。」

古道具屋^{ふるどうぐや}は、あきらめたようにいいました。しかし、外国人のほうは、あきらめられないというように、じっと、わたしを見つめていました。



「ダーマースクス、ダーマースクス……。」

いきなり外国人は、こういうと、つめの長い手をのばして、わたしのからだじゅうを、なでまわすような手ぶりをしました。くると、うしろむきになると、げんかんからとびだして、いつてしまいました。古道具屋ふるどうぐやもかえました。

さて、わたしは、へやにもどると、さっそく、テーブルをひきだして、見なおしました。よく見ると、それまで気がつきませんでした。テーブルの板いたのうらがわに、クギでひっかいたような字が、はりつけてありました。

（なんだろう……？）

と、わたしは、その字をしらべてみました。それは、どうやら、古代トルコの字のようで、こんなことが書かれていました。

ダーマースクス、ダーマースクス

これはベルベネのテーブルなり

ベルベネをねんじつつ

のぞみのものでよとなえよ

さらば、たちまちでん

ダーマースクス、ダーマースクス

のぞみのものをいえば、なんでもこのテーブルからでてくるというのです。あんまりばかばかりして、わたしは、わらいました。

しかし、ものはためしだ。とにかく、やってみようという気になって、ちょうど、そのとき、コーヒーがのみたかったので、

「ダーマースクス、ダーマースクス……でろでろコーヒー。」
と、いつてみました。

できました！ でも、コーヒーではありません。赤ぶどう酒しゅのびんが一本、によっきりと、テーブルの上に、立っていました。

「ほう！」

わたしは目を見はって、おどろきました。そのぶどう酒しゅを、ほんのすこし、なめてみました。

ほんものです。なんともいえない、すばらしいあじでした。

さあ、わたしは、すっかりうれしくなりました。が、おちついてかんがえてみると、わたしがそのときほしかったのは、ぶどう酒しゅではなくてコーヒ―です。そこで、やりなおすことにしました。

「ダーマースクス、ダーマースクス……でろでろコーヒ―。」

すると、こんどは、まっ白なさとうがかかっているケーキが、ひとつ、ひょいと、テーブルの上にとびだしました。

「おっと、また、まちがった！ やりなおし。」

ところが、いくどやりなおしても、だめでした。そのたびに、ちがったものがでてくるのです。わたしは、じれったくなりました。

そのうちに、そうだ、このテーブルには、古代こだいトルコのことばでなければつうじないのかもしれないと、気がつきました。さっそく字引をしらべると、ほしいものの名をおぼえこんでから、「なになに、でろ！」と、やってみました。それでもだめです。ミルクがのみたいとおもっているのにビフテキがでてきたり、パンがほしいのにビールがでてきたり、お茶のかわりに

ビスケットがでたり、てんで、ちぐはぐばかりです。

「ちえっ！」と、わたしは舌^{した}うちをして、ガツーンと、テーブルをなぐりました。「この中にはきつと、魔^まものがかくれているんだ！」

それからのわたしは、テーブルのことばかりかんがえるようになりました。いやなゆめばかりみるのです。夜もおちおちねむれません。ある日、わたしは、おのをもちだすと、テーブルをたたきこわしてしまいました。

ああ、それなのに、つぎの朝になると、ちゃんと、テーブルが、もとどおりに、わたしのへやにあるのです。

「ちくしょうめ！」

わたしは、気がくるいそうになりました。わたしは、おのでテーブルをめちやめちやにこわすと、火にくべてしまいました。ところが、やっぱりテーブルは、あくる朝には、もとどおりになっているのです。そうです。あのにくらしいテーブルが、わたしのへやのまん中に、がんばっているのです。

ああ、わたしは、おそろしいテーブルにつけまわされて、どうすることもできないでいるの